

アメリカ政治における政治的分極化

○西川 賢 (津田塾大学)

Ideological Polarization and Affective Polarization in the United States

* M. Nishikawa (Tsuda University)

Abstract— We often hear about “the polarization of American politics.” However, what does it mean to state that American politics is polarized? In this paper, the author examines (1) the definition of polarization, (2) research methods of polarization, and (3) ways to overcome polarization.

Index terms— Affective Polarization, Ideological Polarization, American Politics, Computational Social Science

1 はじめに

アメリカ合衆国（以下アメリカ）の政治が分極化しているとする報道は日本でもよくみかける。アメリカ社会が分断されている、という趣旨の報道なども、同様である。

しかし、アメリカ政治・アメリカ社会が分断されているとは、どういう意味だろうか。アメリカ社会が多様であり、人種や宗教といった社会的・文化的な対立が政治対立の軸に転化し、それに従った形で政治的対立が観察されるという意味であるならば、それは現在に始まったことではない。

必要とされているのは、「アメリカの分断」なるものを正確に定義するとともに、それがもたらす帰結、研究動向、分断を克服する方法の有無とその是非について、正確な理解に基づいたうえで議論を深めることであろう。

そこで、この論文では、(1) 分極化の定義、(2) 計算社会科学の研究手法に基づく近年の研究の紹介、(3) 分極化を克服するために提案されている手段の検討の三点に注目して議論を進める。

2 分極化とは何か

Hacker と Pierson は 2005 年に書かれた *Off Center* と題する著作の中で、議会共和党がどうして偏向しているのか、という課題に取り組んだ。この著作の出版以降、アメリカ政治における分極化が大きな注目を集めることとなった。

ここでいう分極化とは、「イデオロギー的分極化」(Ideological Polarization) と定義されるものである。すなわち、二大政党内部におけるイデオロギー的凝集性の拡大と、それに伴って生じる二大政党間のイデオロギー距離の一層の隔たりを指す。いわば、共

和党は一層保守的になり、民主党はよりリベラルになって、中道派が少なくなったことで両政党のイデオロギー的な距離が拡大している。イデオロギー的分極化は、最も古典的な分極化の形態と考えられる 1) 2) 3)。

Noran McCarty が指摘しているように、なぜ二大政党が分極化したのかについては諸説あるが、原因の一つは、政党の再編成である。簡単にいうと、かつては北部を中心とする政党であった共和党は、1960年代に公民権法に反対するスタンスを打ち出して急速に右傾化し、南部に基盤を置く政党に生まれ変わっていった。対して、民主党は南部に代わって北部や西海岸で勢力を伸ばすようになってリベラル化していった 4)。

イデオロギー的分極化に関する研究においては、分極化がアメリカの政治に好ましからざる影響を与えているという指摘が早くからなされていた 5)。たとえば、ニューディール政策と総称される一連の立法や公民権法・投票権法といった過去の重要立法の投票においては、党派を超えた協力を得て、法案が可決されることが多かった。かつては重要立法の 7割超が超党派の協力によって成立したという。しかし、現在ではこうした超党派立法は影を潜めてしまっている 6) 7) 8)。

こうして、現代のアメリカ政治からは中道が消失するとともに、両党はイデオロギー的に極端な性質を強めて激しく対立し、政治に停滞と混乱を招いていると批判されており、国民の政治不信の大きな原因となっているという指摘もある 9) 10) 11) 12)。

イデオロギー的分極化を研究する際に用いられてきた研究手法であるが、二大政党内部、あるいは二大政党間のイデオロギー距離を計測するのに用いられていたのが、DW-NOMINATE のような観察デ

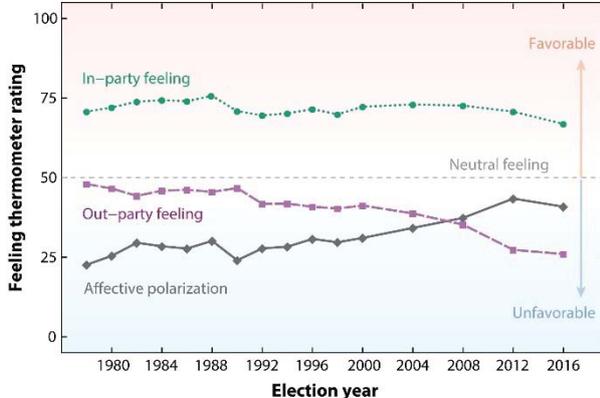
一タである。また、分極化の歴史的起源を追究する際には歴史的事例研究が用いられてきた。

DW-NOMINATE について述べると、これは議会における法案や決議案・動議に対する点呼投票をもとに議員のイデオロギー距離を測定したものである。議員は単峰の効用関数において、自らの最適点に最も近い立場を選択しようとする。点呼投票での投票パターンを、多次元尺度法を利用して二次元空間に配置し、それを大きな政府・小さな政府のどちらを志向するかというイデオロギーであるとみなす 13)。

以上の「イデオロギー的分極化」に対して、近年注目されるようになってきているのが、「感情的分極化」(Affective Polarization) と呼ばれるものである。論者によって同じ現象を異なる用語で形容しており、「政治的セクト主義」(Political Sectarianism)、あるいは「政治的部族化」(Political Tribalism) などの用語を用いて形容するものも存在する 14) 15)。

感情的分極化はイデオロギー的対立ではない。それはある集団(民主党/共和党)に道徳的な愛着を抱く集団が、自集団以外の集団に対して抱く反感・憎悪によって特徴づけられる対立である。

ある特定の政党に愛着を持っている人々は自党と自党の支持者を「内集団」とみて、他党の支持者を異質な「外集団」と認識するようになり(他者化: Othering)、それら「外集団」に嫌悪・不信感を抱くようになり(嫌悪感: aversion)、外集団を不正、邪悪、偽善的、自己中心的で排他的な存在であると認識するようになる(道徳化: moralization) という 16) 17) 18)。1970年代から2016年の40年間で、自党に対する内集団意識はほぼ変わっていないが、外集団に対する感情温度(Feeling Thermometer)は20ポイント以上も低下している(Figure 1参照) 19)。



より引用。

ちなみに、共和党はイデオロギー的に分極化しているのに対して、民主党がよりグループに対するアイデンティティで分極化しているといわれることもあり、政党に生じている変化は非対称であるともいわれている 20)

要するに、今のアメリカ政治における対立、政治的分断とはイデオロギー的なものではなく、集団間のアイデンティティをめぐる対立に転化しているのではないか、という主張がなされているのである。現在のアメリカでは、自分のイデオロギーに近い政党に所属する有権者の割合が増加しているが、イデオロギー的分極化の影響で、いまや民主党員の大多数がリベラル、共和党員の大多数は保守である(Iyenger)。特定の政党を支持している人々は、自らと考えの異なる人々に遭遇することはなく、人種や宗教など、政治的イデオロギー以外のアイデンティティも党派心と重複させていくようになる 21)。

含意としては、イデオロギー的分極化に比して、感情的分極化はより深刻な影響を社会・政治にもたらす。感情的分極化の進行に伴って、否定的政党支持(Negative Partisanship)が増えているからである。すなわち、いまや政党の支持者は、自党の理念や政策に対する指示や愛着ではなく、相手政党に対する敵意・嫌悪感から自党を応援する 22)。こうなれば、選挙で敗北することは単なる「政治的敗北」以上のものとなり、自己生存上の脅威であるかのように捉えられるようになる。今や、アメリカ人同士で党派が異なるものはほとんどデートも結婚もせず、近隣に居住さえしないという指摘すらある 23)。

Nathan KalmoeとLillian Masonはさらに研究を進め、アメリカにおける政治的暴力の増加を分析している。対立相手を悪魔化したり、暴力的な政治的態度をとったり、攻撃的な行動をとったりすることで、急進的な意見は、少数の人々による物理的暴力行使を含む、極端な行動を促す環境を生み出していることを指摘している 24)。

こうした感情的分極化に伴う新しい傾向は、民主主義的規範への支持を損なうとも指摘されている。感情的に偏向してしまった党派性を抱く人々は、政府が取っている政策を党派的な信念へと変換する 25)。これらの人々は、自分の政党が政権を握っているときには特定の争点に反対するが、自分の政党

が政権を下野すると、今度はその争点を一転して支持するようになる。たとえば、対立する政党に対して高いレベルの否定的党派心を抱いている党員は、COVID-19 に対する「米国」の政策的対応を政府による政策とは考えず、トランプ政権の「行動」であるとみなして、否定的なリアクションをとる。また、感情的偏向は、有権者に他党支持者が有する権利を不当に制限するよう動機付けるバイアスを生み出すとも指摘されている 26)。さらに、感情的分極化が強い国家においては、権威主義的リーダーが支持されやすいという研究例もある 27)。

2016 年に世界を騒がせたドナルド・トランプの大統領選挙勝利について、Bob Woodward は興味深い証言を紹介している。トランプの側近で娘婿であるジャレッド・クシュナーは以下のような発言をしていたという。

二大政党はいずれも本物の政党とはいえない。複数の部族の集まりだ...共和党は多数の部族の寄り合い所帯だ...争点が重要だったのではないと思う...言動が重要だったのだと思う。28)

この発言が正しいとすれば、トランプは感情的分極化に関する正しい認識を持ち合わせており、2016 年の選挙時に共和党支持者に正しく訴えるにはどうすればよいかを（直感的に）理解していたということになるだろう。

3 分極化に関する研究手法の変化

分極化を研究するための手法自体も変化しており、イデオロギー的分極化研究で用いられてきたような事例研究や DW-NOMINATE のようなサーベイ・データ以外にも、様々な手法が用いられるようになってきている。

感情的分極化を測定するには、ANES の感情温度がよくつかわれている。これは、民主党と共和党（または民主党と共和党）について、「冷たい」(0) から「温かい」(100) までの 101 点満点で評価するようサーベイで尋ねるものである。感情的分極化は、回答者の自党に対する評価と反対政党に対する評価との差として計算する。先述したように、1980 年代以降、感情的分極化を示す感情温度は上昇しており、1978 年には 22.64 だった感情温度差が、2016 年には 40.87 にまで開いている 29)。Shanto

Iyenger は人種 IAT をもとに、無意識の党派的バイアスを測定するための連想テストを開発し、それを使って感情的分極化を測定するなどの手法も用いている 30)。

さらに、感情的分極化が招く帰結に関する研究成果では、計算社会科学的な手法も用いられるようになってきている。

SNS を利用する人々は、同じようなコンテンツを好んで利用する傾向があるといわれるが、これは感情的分極化を深刻化させているかもしれない 31) 32)。あるいは、自らの見解と異なるコンテンツに触れた SNS ユーザーは、自己の意見を変更するだろうか 33)。究極的には、SNS の利用は分極化を深刻化させるのか、それとも緩和するのか 34) 35)。これらの点については様々な研究がある。現在では、SNS データを用いた分極化の研究は盛んに行われている。数が多いので、網羅はできないが、以下にいくつか例を挙げよう。

第一に、Nikita Melnikov は Mobile Coverage Explorer を用いて 2007 年から 2019 年までの 3G の移动通信データを収集し、それを Gallup Daily Poll による個人の政治的選好に関するデータと合わせて分析を行った。その結果、3G でインターネットにアクセスする民主党寄りの有権者は、政治的見解がよりリベラルになり、民主党候補者や政策課題への支持が高まった。共和党寄りの有権者も、より穏健な方向にシフトした。つまり、分極化は SNS では生じず、3G 登場後、インターネットやソーシャルメディアを利用している両党のユーザーは、ともに民主党寄りになり、共和党寄りのユーザーが減少し、政治的知識を増やしたとする結果を提示している 36)。

第二に、いわゆる「エコーチェンバー」や「フィルターバブル」といった現象は感情的分極化の原因であると指摘されることがある。メディア技術の進歩に伴って、自らと異なる意見を避け、人々は自らと同じような意見の中へと「自己隔離する」ようになる。このような SNS 上の意見の分離によって、人々はいっそう極端な立場へと偏向し、それが感情的分極化のもととなって政治対立を引き起こしているとされる 37) 38)。

第三に、関連する研究として、Waller と Anderson は、Reddit から抽出された 51 億個もの投稿からなるコミュニティ・データを用いて、投稿の特徴について word2vecf を用いてベクトル化し、それらを比較

している。「党派性」の軸には”Democrats”と”Conservative”という二つのコミュニティが基準に選ばれており、そのコミュニティと近似するベクトルを持つコミュニティはそれぞれ右派/左派に分類される。右派はアニメのコミュニティ、左派は個人的な争点や歴史といったトピックが多いコミュニティが多いという特徴を有する。また、Reddit における政治的コンテンツは2016年選挙を境目に新規ユーザー中心に右派的に偏向し始めており、分極化は激しさを増していると指摘されている(39) 40)。

同様に、Marchal も 2018 年の中間選挙前に Pushshift.io API をデータとして用いて、Reddit の r/politics における政治的議論がどの程度まで感情的に偏向しているのかをセンチメント分析や回帰分析を使って調べている。その結果、イデオロギー的に対立するユーザー間の相互作用は、同じ考えを持つユーザー間のインタラクションよりも有意に否定的であった。また、これらの交流は、一方のユーザーが他方の集団を否定的に言及した場合、継続するよりも中断される可能性が高いこともわかった。逆に、どちらかのユーザーが外集団に対して肯定的感情を表明した場合には、否定的な反応よりも肯定的な反応が得られる可能性が高く、集団間の感情的対立が緩和された(41)。

以上のように、最近の感情的分極化の研究では SNS データの活用や自然言語処理の手法など、計算社会科学の分析手法が用いられるようになっている。

4 分極化の克服は可能か

分極化を克服するための解決策なるものは、数多く提案されている。たとえば、ジェリマンダリング(恣意的な選挙区割り)、閉鎖的予備選挙、あるいは選挙資金などの制度こそ分極化を招く根源とみて、これを改革するべきであるとする意見は少なくない。有権者への選挙情報の有効な提供など、有権者教育に力を入れるべきであるとする穏健な改革案も提案されている。極端な意見としては、予備選挙制度の完全な廃止、投票の義務化、小選挙区に代わって比例代表制度の導入などを提唱する論者もいる(42)。

これらいずれかの手段をもってすれば、分極化は克服可能なのだろうか。残念ながら、これらの解決策は十分な効果を上げていないものも少なくない。

一例をあげると、カリフォルニア州で導入された予備選挙改革は想定されたような効果をあげなかった。制度改革後も有権者と候補者のイデオロギー的距離は縮まらず、場合によってはさらに悪化しているとされる。制度改革で期待されたより穏健な候補者の増加も、期待通りの結果を招いていない(43) 44)。

提案された改革案はなぜ期待通りの効果を発揮していないのだろうか。既存の改革提案はイデオロギー的分極化を克服するための提案という側面が強い。だが、現下のアメリカにおける分極化がイデオロギー的分極化より感情的分極化の側面が強いたら、感情的分極化の克服に特化した解決案を考えねばならない。

この問題を考えるにあたって、報告者が公刊した共著論文の知見を紹介したい。Petter Törnberg からも指摘するように、社会的アイデンティティとオピニオン・ダイナミクスの相互作用を理論的に研究することは、感情的分極化を理論的に理解することにつながる(45)。Tajfel らによって提唱された社会的アイデンティティ理論によれば(46)、グループへの帰属意識こそ、グループ間の偏見や差別・対立を引き起こし、最終的に社会的葛藤につながる。ある人がアイデンティティを帰属させる「内集団」と、それとは異なる集団である「外集団」は、どのような条件のもとで、対立するグループ間行動をより調和的な関係に変え、社会的紛争を回避することができるのか。このような社会的アイデンティティ理論に依拠しつつ、報告者らは社会物理学における「オピニオン・ダイナミクス理論」を二大政党にあてはめ、簡単なシミュレーションを行った(47)。

シミュレーションによると、2つの集団が自集団のメンバーを高い信頼度(80%以上)をもって信頼しており、集団間に信頼が成り立たない場合、当然ながら当該(内)集団の意見は収束し、二集団は対立するとともに、集団内部の意見にも多様性がなくなる(Figure 2 参照)。しかし、集団内の信頼度が低下すると、集団内の意見は多様化していく。一方、集団間の意見は、集団間の信頼度が高まってくると収束し始める。集団内のメンバー相互の信頼度が55%程度で、集団間の信頼度が50%以上であれば、二集団の意見は重なりはじめる。集団間の信頼度が80%を超えると、両集団の意見は完全に合意を

みる (Figure 3 参照)。しかし、集団内の信頼度が70%程度に保たれている場合、集団間の信頼度が70%程度以上に上がらない限り、二集団間の意見は二極化し、二集団の意見は対立したままとなる (Figure 4 参照)。要するに、対立する二集団間において意見の収斂がみられるようになるには、集団間に高い信頼が存在し、集団の構成メンバーが自らの属する内集団のメンバーを必要以上に過信しないという条件が必要になるのではないかと48)。

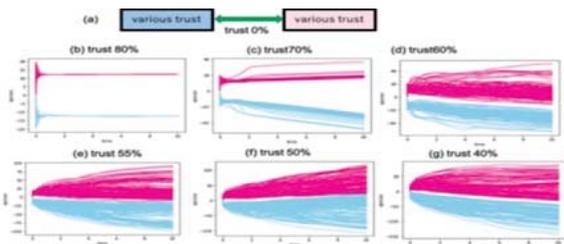
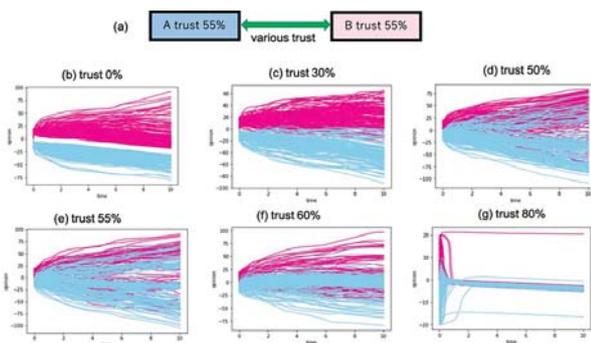
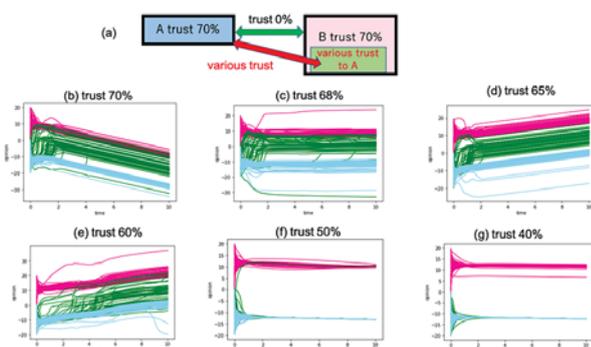


Figure 2. Ishii, A., Okano, N., Nishikawa, M. 2021. “Social Simulation of Intergroup Conflicts Using a New Model of Opinion Dynamics.” *Frontiers in Physics*, 9.より引用。



“Social Simulation of Intergroup Conflicts Using a New Model of Opinion Dynamics.” *Frontiers in Physics*, 9.より引用。



“Social Simulation of Intergroup Conflicts Using a New Model of Opinion Dynamics.” *Frontiers in Physics*, 9.より引用。

報告者らがこの論文中でいいたかったことは、現実には、以上のような条件をクリアし、二集団が意見を収斂（一致）させるようになるのは至難の業ではないかと、ということである49)。「意見の一致」

が感情的分極化を克服する第一歩であるとするれば、対立する二集団の意見が収斂するにはかなり難度の高い条件をクリアすることが必要となる。分極化の克服は非常に困難と考えざるを得ない。

報告者らによる研究成果を裏付けるような実証上の知見も存在する。第一に、Sam Whitt らの研究によれば、現在の民主党・共和党に所属する人々は自らと同じ党派に属する人に多くの資源を配分する傾向があるのに対して、無党派の人々はより公正な資源配分を企図する。つまり、現在の民主党員と共和党員は、実際に内集団／外集団化しており、政党間の対立、すなわち感情的分極化は近年ますます強化されている50)。この研究成果が正しいとすると、われわれの研究成果とあわせて考えれば、感情的分極化が克服される可能性は低そうである。

第二に、Eric Groenendyk らの研究によれば、政党内では内部分裂が進行しつつあり、イデオロギー性の強い党员は、自党に対して非常に好意的な感情を示し続けるものの、イデオロギー的に穏健な党员は、自党に対する好意度が低く、両者の距離が開きつつあるという51)。これが正しいとすると、われわれの研究成果とあわせて考えれば、感情的分極化が緩和される可能性が高まっていると考えられる。

この点に関連して、Lilliana Mason によれば、このような感情的分極化の果てに出現した内集団／外集団対立を解消する可能性のある方策は、複数存在するという。具体的には、(1) 接触仮説 (Contact Theory)、(2) 政党内規範の形成 (Social Norms)、(3) 高次の目標 (Superordinate Goals) が感情的分極化を和らげる効果を持つのではないかと Mason は示唆する52)。

(1) 接触仮説：接触仮説とは、グループの成員同士が共通の目標に向かって接触することを通じて、集団間の偏見を減らすことができるという仮説である53)。この仮説は長年にわたって検証が続けられており、接触が集団間の偏見を減らす効果があるとされている54)。

接触仮説が正しいとすれば、共和党と民主党の間に存在する感情的分極化も接触によって緩和できるはずである。実際、党派を超えた接触が民主党員と共和党員の間が存在する共通性を自覚させ、相互に敵意を弱めるという実証研究も存在する55)。ま

た、共同でライティング活動に取り組むことで感情的・政治的偏向を減らせるとする実験結果も報告されている 56)。

しかし、現在のアメリカで接触による意見の変容はあまり期待できないであろう。Robert Putnam が『われらの子供』の中で指摘するように、アメリカでは何十年も前から地理的な分断が発生して社会階層ごとの居住値が分離するようになっている。これは社会階層の流動性を低下させ、階級間格差を強めたと述べている 57)。同様に、Brown と Enos は空間データを用いて、様々な場所で党派の居住分離が見られたことを報告しており、有権者は党派ごとに居住地が異なっており、地理的な政治的分断ともいべき現象が起きていると指摘している 58)。こうした居住地の分離は他地域に居住する他集団に対するネガティブな認知・言動を強化する 59)。

現在のアメリカでは、感情的分極化は、居住地の分離から、食事をとるレストラン、自家用車の好み、視聴するテレビ番組、好んで食べる食品、乗用車の好みなど、ライフスタイル全般の差異にまで及んでいると考えられている。Hetherington と Weiler は、これらの人々はそれぞれ流動的 (fluid) と固定的 (fixed) な世界観を持っており、流動的な世界観を持つ人々は都市に住み、固定的な世界観を持つ人々は農村部に住む。根底にある世界観の差によって、両者のライフスタイル志向性は全く異なるものになっており、相互の乖離が進んでいると指摘している 60)。

Mason も指摘しているが、このような状況下では、そもそも民主党员と共和党员が接触する機会自体が限られたものになっていることは否めない。また、接触仮説の研究で指摘されているように、適切な条件を満たさずに集団間で接触が行われると、かえって相互に対する不信感や敵意が高まる 61)。

(2) 政党内規範の形成：政党が党内規範を強化し、他の政党・集団に対する理解を高め、外集団に対する敵愾心・偏見を和らげるというものである 62)。この点について、人が党派性を持つことの是非、あるいは政治や社会において、対立する人々が妥協することは美徳か、それとも悪徳なのかといった、哲学的な問いにさえ発展している 63)。Mason も指摘しているように、現在の二大政党内部にこの

ような規範を高めようとする動きは具体的に存在せず、こうした試みが着手・成功する可能性もまた低いであろう 64)。

(3) 高次の目標：集団間の対立に関する古典的研究 (the Robbers Camp Cave Experiment) でも示唆されているように、対立している集団が協力しないと解決できないような課題に協同して取り組めば、集団間対立は解消するという知見がある 65)。Matthew Levendusky もアメリカ国民としてのアイデンティティが高まると、人々は互いを対立する政党に属する党员ではなく、「対等なアメリカ人」として見られるようになることを示した。その結果、対立する政党への好感度が高まり、感情的な偏向が緩和されるという 66)。Mason は両党が協同して取り組む課題は数多くあるものの、協同作業・共同意識を促す契機となるものを見出すことが難しいと述べている 67)。

米国を含む数か国の比較研究でも幸福感などの感情は感情的偏向を減少させなかったとされており、外集団に対する敵愾心が安定していることを示唆している 68)。いずれにせよ、これを克服することは容易ではないと考えられる。

5 おわりに

この論考では以下のことを明らかにした。

第一に、分極化の定義である。現在のアメリカでは、イデオロギー的分極から、感情的分極化と呼ばれるものに対立の焦点が移りつつある。両者の定義とそれがもたらす帰結について定義した。

第二に、計算社会科学との関連で、分極化を研究するための手法が変遷していることを指摘した。

第三に、分極化を克服するために提案されているアイデアを紹介し、その内容と限界を検討した。

冒頭でも述べたように、アメリカ社会・アメリカ政治の分裂・分断を謳う報道などは日本でも数多い。繰り返しになるが、重要なことは分極化に関する正確な知識を持ったうえで議論をすることである。

参考文献

- 1) McCarty, N., Poole, K., Rosenthal, H., *Polarized America: The Dance of Ideology and Unequal Riches*, The MIT Press, 2006.
- 2) 松本俊太, アメリカ連邦議会における二大政党の

- 分極化と大統領の立法活動（一），名城法学，第58巻・第4号，25-57，2009.
- 3) 松本俊太，連邦議会指導部によるコミュニケーション戦略の発達と2012年連邦議会選挙，吉野孝・前嶋和弘編，オバマ後のアメリカ政治—2012年大統領選挙と分断された政治の行方，東信堂，2014.
 - 4) McCarty, Poole, and Rosenthal, *Polarized America: The Dance of Ideology and Unequal Riches*.
 - 5) 松本俊太，アメリカ連邦議会における二大政党の分極化と大統領の立法活動（一）.
 - 6) McCarty, N., The Policy Effects of Political Polarization, in Pierson, P. and Skocpol, T. (eds.) *The Transformation of American Politics: Activist Government and the Rise of Conservatism*, Princeton University Press, 2007.
 - 7) 西川賢，分極化するアメリカとその起源：共和党中道路線の盛衰，千倉書房，2015.
 - 8) Lee, F., *Beyond Ideology: Politics, Principles, and Partisanship in the U.S. Senate*, University of Chicago Press, 2009.
 - 9) Stonecash, J. M., Bremer, M. D., Mariani, M. D., *Diverging Parties: Social Change, Realignment, and Party Polarization*, Westview Press, 2002.
 - 10) Hacker, J. S., and Pierson, P., *Off Center: the Republican Revolution and the Erosion of American Democracy*, Yale University Press, 2005.
 - 11) McCarty, The Policy Effects of Political Polarization.
 - 12) 待鳥聡史，イデオロギーと統治の間で，アステイオン，第69号，76-98，2008.
 - 13) 蒲島郁夫・竹中佳彦，イデオロギー，東京大学出版会，2012.
 - 14) Finkel E.J., Bail, C.A., Cikara, M., Ditto, P.H., Iyengar, S., Klar, S., Mason, L., McGrath, M.C., Nyhan, B., Rand, D.G., Skitka, L.J., Tucker, J.A., Van Bavel, J. J., Wang, C.S., Druckman, J.N., Political sectarianism in America, *Science*. Oct 30;370(6516), 533-536, 2020.
 - 15) Chua, A., *Political Tribes: Group Instinct and the Fate of Nations*, Penguin Books, 2019.
 - 16) Finkel, et al., Political sectarianism in America.
 - 17) Bell, A. C., Eccleston, C. P., Bradberry, L. A., Kidd, W. C., Mesick, C. C., Rutchick, A. M., Ingroup Projection in American Politics: An Obstacle to Bipartisanship, *Social Psychological and Personality Science*, (October 2021).
 - 18) Iyengar, S., Lelkes, Y., Levendusky, M., Malhotra, N., Westwood, S. J., The Origins and Consequences of Affective Polarization in the United States, *Annual Review of Political Science*, 22(1), 129-146, 2019.
 - 19) Levendusky, M. S., Americans, Not Partisans: Can Priming American National Identity Reduce Affective Polarization? *The Journal of Politics*, 80(1), 59-70, 2018.
 - 20) Grossmann, M., Hopkins, D. A., *Asymmetric Politics: Ideological Republicans and Group Interest Democrats*, Oxford University Press, 2016.
 - 21) Iyengar, et al., The Origins and Consequences of Affective Polarization in the United States.
 - 22) Abramowitz, A. I., *Great Alignment: Race, Party Transformation, and the Rise of Donald Trump*, Yale University Press, 2018.
 - 23) Finkel, et al., Political sectarianism in America.
 - 24) Kalmoe, N. P., Mason, L., Radical American Partisanship: Mapping Violent Hostility, Its Causes, & the Consequences for Democracy. <https://nathankalmoe.com/radical-american-partisanship/>, 2021.
 - 25) Druckman, J., Klar, S., Krupnikov, Y., Levendusky, M., & Ryan, J., How Affective Polarization Shapes Americans' Political Beliefs: A Study of Response to the COVID-19 Pandemic, *Journal of Experimental Political Science*. 8(3), 223-234, 2021.
 - 26) Kingzette, J., Druckman, J. N., Klar, S., Krupnikov, Y., Levendusky, M., Ryan, J. B., How Affective Polarization Undermines Support for Democratic Norms, *Public Opinion Quarterly*, 85 (2), 663-677, 2021.
 - 27) Crimston, C.R., Selvanathan, H.P. and Jetten, J., Moral Polarization Predicts Support for Authoritarian and Progressive Strong Leaders via the Perceived Breakdown of Society, *Political Psychology*, Online First, 2021.
 - 28) ポブ・ウッドワード，RAGE（怒り），日本経済新聞出版，2020.
 - 29) Iyengar, et al., The Origins and Consequences of Affective Polarization in the United States.
 - 30) Iyengar, et al., The Origins and Consequences of Affective Polarization in the United States.
 - 31) Lelkes, Y., Sood, G., Iyengar, S., The Hostile Audience: The Effect of Access to Broadband Internet on Partisan Affect, *American Journal of Political Science*, 61(1), 5-20, 2017.
 - 32) Boxell, L., Gentzkow, M., Shapiro, J. M., Greater Internet use is not associated with faster growth in political polarization among US demographic groups, *PNAS*, 114(40), 10612-10617, 2017.
 - 33) 小林哲郎・稲増一憲，ネット時代の政治コミュニケーション—メディア効果論の動向と展望，選挙研究，27巻1号，85-100，2011.
 - 34) Barberá, P., How Social Media Reduces Mass Political Polarization. Evidence from Germany, Spain, and the U.S., *Paper prepared for the 2015 APSA Conference*, 1-46, 2015.
 - 35) Beam, M. A., Hutchens, M. J., Hmielowski, J. D., Facebook news and (de)polarization: reinforcing spirals in the 2016 US election, *Information, Communication & Society*, 21(7), 940-958, 2018.
 - 36) Melnikov, N., Mobile Internet and Political Polarization, *Available at SSRN*: <https://ssrn.com/abstract=3937760>, 2021.
 - 37) Sunstein, C.R., *Echo chambers: Bush v. Gore, impeachment, and beyond*, Princeton University Press, 2021.
 - 38) Sunstein, C. R., The law of group polarization, *John*

M. Olin Program in Law and Economics Working Paper No. 91, 1999.

- 39) 松井暉, 大規模な投稿データから機械学習で分析軸を紐解く, *経済セミナー*, 111-113, 2021.
- 40) Waller, I., Anderson, A., Quantifying social organization and political polarization in online platforms, *arXiv*: 2010.00590, 2020.
- 41) Marchal, N., Be Nice or Leave Me Alone An Intergroup Perspective on Affective Polarization in Online Political Discussions, *Communication Research*, Online First, 2021.
- 42) Persily, N. (ed.) *Solutions to Political Polarization in America*, Cambridge University Press, 2015.
- 43) Ahler, D. J., Citrin, J., Lenz, G. S., Do Open Primaries Help Moderate Candidates? An Experimental Test of California's 2012 Top-Two Primary, *Legislative Studies Quarterly*, 41, 237-268, 2014.
- 44) Kousser, T., Phillips, J. H., Shor, B., Reform and Representation: A New Method Applied to Recent Electoral Changes, *Political Science Research and Methods*, 6(4), 809-827, 2016.
- 45) Törnberg, P., Andersson, C., Lindgren, K., Banisch, S., Modeling the emergence of affective polarization in the social media society. *PLOS ONE*, 16(10): e0258259, 2021.
- 46) Tajfel, H., Turner, J., An Integrative Theory of Intergroup Conflict. in Austin, W. G., Worchel, S. (eds) *The Social Psychology of Intergroup Relations*, Brooks/Cole, 1979.
- 47) Ishii, A., Okano, N., Nishikawa, M., Social Simulation of Intergroup Conflicts Using a New Model of Opinion Dynamics, *Frontiers in Physics*, 9, 130, 2021.
- 48) Ishii, A., Okano, N., Nishikawa, M., Social Simulation of Intergroup Conflicts Using a New Model of Opinion Dynamics.
- 49) Ishii, A., Okano, N., Nishikawa, M., Social Simulation of Intergroup Conflicts Using a New Model of Opinion Dynamics.
- 50) Whitt, S., Yanus, A., McDonald, B., Graeber, J., Setzler, M., Ballingrud, G., & Kifer, M., Tribalism in America: Behavioral Experiments on Affective Polarization in the Trump Era, *Journal of Experimental Political Science*, 8(3), 247-259, 2020.
- 51) Groenendyk, E., Sances, M., Zhirkov, K., Intraparty Polarization in American Politics, *Journal of Politics*, 82(4), 1616-1620, 2020.
- 52) Mason, L., *Uncivil Agreement: How Politics Become Our Identity*, Chicago University Press, 2018.
- 53) Pettigrew, T. F., Tropp, L. R., A meta-analytic test of intergroup contact theory, *Journal of Personality and Social Psychology*, 90(5), 751-783, 2006.
- 54) Paluck, E., Green, S., Green, D., The contact hypothesis re-evaluated, *Behavioural Public Policy*, 3(2), 129-158, 2019.
- 55) Wojcieszak, M., Warner, B. R., Can Interparty Contact Reduce Affective Polarization? A Systematic Test of Different Forms of Intergroup Contact, *Political Communication*, 37:6, 789-811, 2020.
- 56) Mäs M, Flache A., Differentiation without distancing. explaining bipolarization of opinions without negative influence, *PLoS One*, 8(11): e74516, 2013.
- 57) 口バート・パットナム, われらの子供: 米国における機械格差の拡大, 創元社, 2017.
- 58) Brown, J.R., Enos, R.D., The measurement of partisan sorting for 180 million voters, *Nature Human Behavior*, 5, 998-1008, 2021.
- 59) Enos, R. D. *The Space between Us: Social Geography and Politics*, Cambridge University Press, 2017.
- 60) Hetherington, M., Weiler, J. *Prius Or Pickup?: How the Answers to Four Simple Questions Explain America's Great Divide*, Houghton Mifflin, 2018.
- 61) Mason, *Uncivil Agreement*.
- 62) Mason, *Uncivil Agreement*.
- 63) Muirhead, R., Rosenblum, N. L., The Political Theory of Parties and Partisanship: Catching Up, *Annual Review of Political Science*, 23:1, 95-110, 2020.
- 64) Mason, *Uncivil Agreement*.
- 65) Sherif, H., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., Sherif, C. W., *The Robbers Cave Experiment: Intergroup Conflict and Cooperation*, Wesleyan University Press, 1988.
- 66) Levendusky, Americans, Not Partisans: Can Priming American National Identity Reduce Affective Polarization?
- 67) Mason, *Uncivil Agreement*.
- 68) Yu, X., Wojcieszak, M., Lee, S., Casas, A., Azrout, R., Gackowski, T., The (Null) Effects of Happiness on Affective Polarization, Conspiracy Endorsement, and Deep Fake Recognition: Evidence from Five Survey Experiments in Three Countries, *Political Behavior*, 43, 1265-1287, 2021.